

令和元年6月11日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11624

研究課題名(和文) 治療過程にある高齢がん患者の納得を支援する看護介入プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a nursing intervention program to support the nattoke of elderly cancer patients in the process of treatment

研究代表者

今井 芳枝 (IMAI, Yoshie)

徳島大学・大学院医歯薬学研究部(医学域)・准教授

研究者番号：10423419

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、治療過程にある高齢がん患者の納得を支援する看護介入プログラムの開発を目的に実施した。介入時期は「治療を決める時期」に定め、理論的枠組みはオタワ意思決定支援ガイドを使用した。かつ介入者は、看護師が患者の意思決定プロセスを共有しながら支援するためのガイドとして活用できる川崎氏が考案したがん患者の意思決定プロセスを支援する共有型看護相談モデル(介入者のレディネス)とした。研究期間中の納得の概念分析の結果や質的研究の結果を用いて、アウトカムツールの作成と高齢者の要素の取り込みを行った。現在は介入プログラム案(フロー図)を作成しており、今後はこの介入結果の報告書の作成や論文化を推進する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今後、多死社会の到来に際して、現在では医療政策のパラダイムシフトが起こっている。この医療の転換期において、今後は在宅医療の推進・充足が重要となる。がん治療においても病院での入院治療から外来・在宅医療での治療への変換していく中で、患者自身が多様な治療状況や環境において納得して療養生活を送ることが出来るようになるための具体的な介入指針となるプログラムとなると考える。しかしながら、在宅医療に関しては、非常に地域性が影響をあたえる。このことを考えると今後はプログラムを施行していくための地域性を加味しながら修正と場に合わせて適用ができるような柔軟性を取り入れた介入方法を考慮する必要がある課題がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a nursing intervention program to support the consent of elderly cancer patients in the process of treatment. Intervention time was defined as "time to decide on treatment" and the theoretical framework used the Ottawa Decision Support Guide. And, the interventionist can use it as a guide for nurses to share and support the decision-making process of patients while sharing a shared nursing consultation model (intervenor's). Based on the results of the concept analysis of the persuasiveness of the research period and the results of the qualitative research, we made an outcome tool and incorporated the elements of the elderly. At present, a draft intervention program (flow chart) is being prepared, and in the future we will promote the preparation and dissertation of the report of this intervention result.

研究分野：がん看護学

キーワード：高齢がん患者 納得 介入プログラム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

がん治療の飛躍的な進歩はこれまで難しかった高齢者にも適応の範囲が拡大している。高度ながん医療の進歩に伴い治療における有害事象への対応が改善され、高齢者でも集学的治療を受けることが可能となった。これに加えて、がんの病態的特性より、高齢者のがん罹患率が増加し、高齢のがんサバイバーが増加している(統計局 HP;がん情報サービス)。このような背景より、積極的治療を受ける高齢がん患者が急増しており、治療を受ける高齢がん患者への看護支援の需要が高まっている(Bibbi,2003)。

高齢者は、身体機能の低下やがん以外の疾患の有病率が高いことから、十分な治療ができないために再発率が高く、治療成績に限られたものとなりやすい(田村,2005)。また、身体機能の衰退から、姑息的治療を勧められたり、治療の中断を説明されたりすることがあり、治療継続できないことで落ち込んだり、逆に、治療を継続することで不安定な状況(原ら,2011)や精神的動揺を引き起こす(中村,2002)ことも報告されている。さらに、視力低下や難聴、認知症やせん妄などから、高齢がん患者の意思の反映が難しい現状やがん治療費の高額化より治療方針が大きく左右される現状も報告されている(田村,2005)。このように、高度に進んだがんの治療は、高齢がん患者への治療という面で利益をもたらした一方で、加齢に伴う衰退の要素から生じる問題と治療に伴う副作用が重なり合い、より複雑な問題を浮き彫りにさせることになった(Blazer, 1994; Kurtz,2001)。100%安全な治療法はなく、選択肢それぞれに一長一短があり、どれを選んだとしても何らかのリスクが伴うとなると、迷いと葛藤が生まれる(秋元,2013)。これらを理解した上で、治療に臨むには、自分の選択に納得することが欠かせない。この納得は、理由の質を表すもの(難波博孝;2006、鈴木愛理;2011)であり、決断のアウトカムとして重要な指標になるもの(萩原京二;2002)である。納得には、患者が主体的に治療へ取り組むことを促進し、医療者の関わり方で意思決定の質をあげることができるかもしれない可能性が秘められている (Tabak,1995;Barry,1996;秋元,1993;井上,1999)。そのため、患者の納得を生みだせるように看護支援する必要性が指摘されている(中西,1998)。特に、高齢がん患者は、複雑な身体・精神・社会状況により先行きが予測しにくく、思い描くような状況下で治療が受けられないことが数多く存在する。確実に完治する治療法が確立されておらず、場合によっては治療制限を受けるかもしれない高齢がん患者の治療では納得は必要不可欠な要素となる。高齢がん患者が納得した上で治療に臨むことは、治療に伴う過酷な状況を受容し、治療を完遂する力につながると考えられる。このように、がん治療を受ける高齢がん患者の納得に焦点をあてることは、高齢者特有の療養過程を考慮し、社会的弱者になりがちな高齢者の人権を擁護することとなり、真のQOLに結びつくと考えられる。

納得に関連する先行研究では、患者の納得の必要性や重要性が指摘されており、特に意思決定やインフォームド・コンセントに焦点化された研究が多い(中西,1998;浜松,2005;沖野,2002;古宇田,2002)。しかし、ほとんどの文献が、カテゴリー名や文章中の記載でとどまり、納得とはどのような状況からもたらされるのか、納得の現象そのものに焦点化している研究は見当たらなかった。納得は日常生活上でありふれた言葉であるため、会話でも文章でもよく使われるが、納得を構成するものを明示的に示しているものはない。そのため患者の持つ納得に踏み込んで看護ケアをしていくには、納得自体を明らかにして、その上で、納得を支援するための看護介入プログラムを検討することが求められる。

2. 研究の目的

研究全体の構想

治療過程にある高齢がん患者が納得し、主体的に治療に取り組むことを支援するために「治療過程にある高齢がん患者の納得を支援する看護介入プログラム」の構築を行うことである。

本研究の具体的な目的

(1)Rodgers(2000)の概念分析の手法で「納得」の概念分析を行い、その結果から、日本の高齢がん患者のがん医療の現状に即した納得の概念定義を行う。

(2)(1)で規定した概念に基づき、高齢がん患者のがん治療に対する納得の要素を質的研究で調査し、「治療過程にある高齢がん患者の納得を支援する看護介入プログラム」試案を作成する。

(3)(2)を基に開発したプログラムを実際に患者に適用し、その効果の検証・評価を行い、より現実に適合する看護介入プログラムの構築を行う。

(4)「治療過程にある高齢がん患者の納得を支援する看護介入プログラム」の構築に対する示唆を得る。

3. 研究の方法

平成 27 年(1 年)で、国内の納得に対する文献を集め、それをもとに Rodgers(2000)の手法を用いた「納得」の概念分析を実施し、「治療過程にある高齢がん患者の納得を支援する看護介入プログラム」を開発する上での概念の定義付けを行う。また、次年度の調査に関しての研究手法を検討する。

平成 28~29 年(2 年)で、規定した概念に基づいて、治療過程にある高齢がん患者の現状や納得について明らかにするために半構成的面接調査を行う。この質的研究より「治療過程にある高齢がん患者の納得を支援する看護介入プログラム」を作成する。

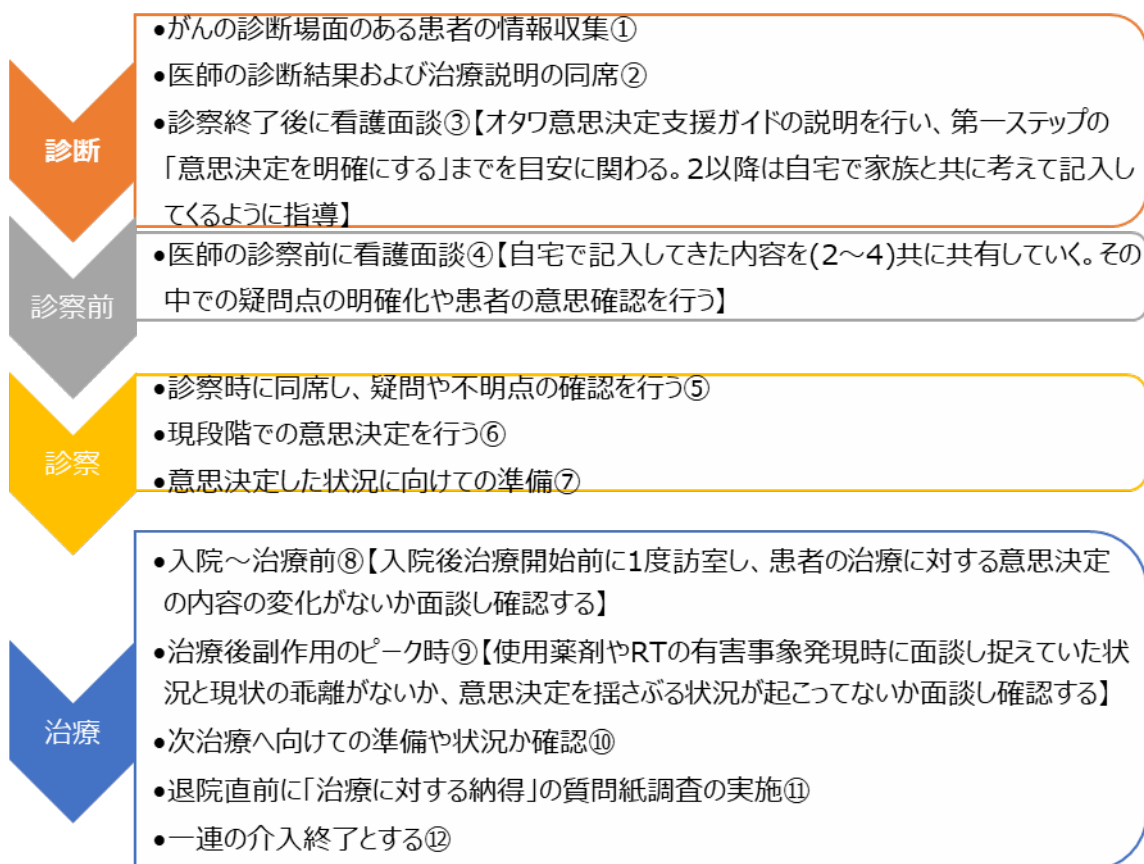
平成 30 年(1 年)で、作成した看護プログラムを高齢がん患者に実施し、実施後には介入の成果を評価するための半構成的面接調査を行う。介入面接時および評価面接時のデータをもとに、プロ

グラムを評価し、より現実に適合する看護プログラムを開発する。また、看護介入プログラムの内容をがん看護の学識研究者およびがん看護専門看護師から意見を得て、有効性ある研究内容を提示できるように努めていく。

4. 研究成果

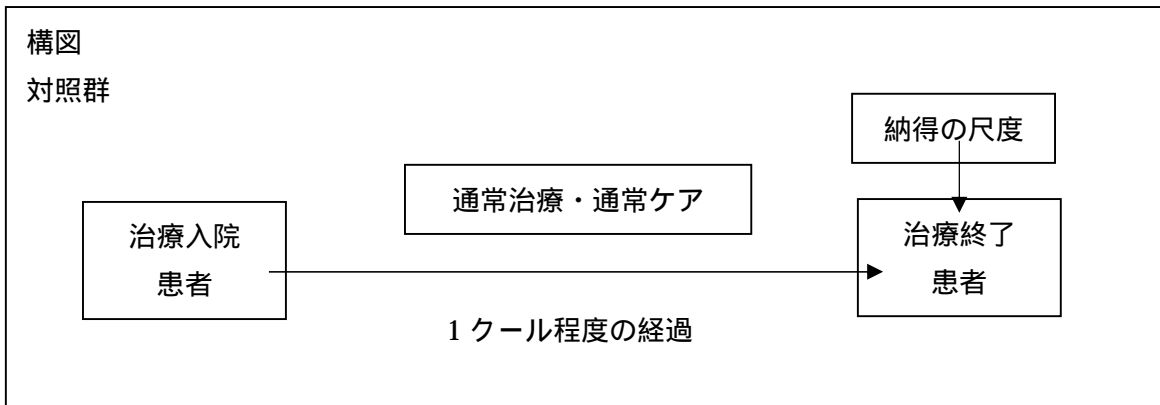
本研究では、治療過程にある高齢がん患者の納得を支援する看護介入プログラムの開発ということで、治療に対する納得を支援する介入モデルの作成を行った。介入モデルの時期は川崎氏は、がん患者が直面することの多い意思決定場面は4場面とし、かつこの場面は外来で遭遇することが多く、外来や在宅看護の担う看護師に求められることが多いと指摘している。治療に対する納得を支援する介入モデルを考えた時、「納得は意思決定の質であり、それはある場面など部分的なものではなく、治療に対して意思決定してきた過程の中で生じてくるもある」ことを考えると、「治療を決める場面」の介入に焦点をあてることが重要ではないかと考え、「治療を決める時期」に定めた。また、介入モデルの理論的枠組みは、患者が自分にとって必要で十分な情報を獲得し、最終的に納得のいく決断をするための支援ガイドであり、(1)意思決定を明確にする、(2)意思決定を探る、(3)自分の意思決定のニーズを見極める、(4)ニーズを基に次のステップを計画する、の4ステップで構成されているオタワ意思決定支援ガイド(介入プロセス)を使用した。かつ介入者は、日本人の気質に即した意思決定支援を体系化し、がん患者が療養中に自分の気がかりや価値観に気付きながら、自分らしい意思決定ができるようになることを目的としており、看護師が患者の意思決定プロセスを共有しながら支援するためのガイドとして活用できる川崎氏が考案したがん患者の意思決定プロセスを支援する共有型看護相談モデル(介入者のレディネス)とした。研究期間中の納得の概念分析の結果や質的研究の結果を用いて、アウトカムツールの作成と高齢者の要素の取り込みを行った。現在は介入プログラム案(フロー図)を作成しており、今後はこの介入結果の報告書の作成や論文文化を推進する予定である。

フロー図

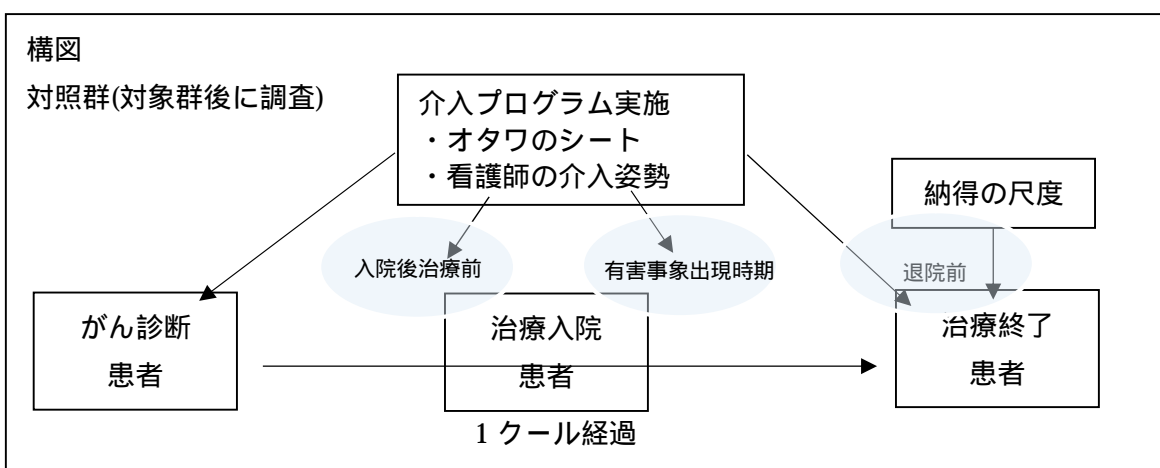


対照群と介入群の設定

対照群設定



介入群設定



5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

今井芳枝、雄西智恵美、板東孝枝：「納得」の概念分析、日本看護研究学会誌,Vol.39,No.2,73-85、2016(査読有)

今井芳枝、雄西智恵美、板東孝枝：転移のある高齢がん患者の治療に対する納得の要素、日本がん看護学会誌,Vol.30,No.3,19-28、2016(査読有)

〔学会発表〕(計 1 件)

Yoshie IMAI, Chiemi ONISHI, Takae BANDO: Elements regarding how older cancer patients achieve Nattoku、19th East Asian Forum OF Nursing Scholars(幕張)、2016(査読有)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：雄西 智恵美
ローマ字氏名：(ONISHI, Chiemi)
所属研究機関名：徳島大学
部局名：大学院医歯薬学研究部(医学域)
職名：教授
研究者番号(8桁)：00134354

研究分担者氏名：板東 孝枝
ローマ字氏名：(BANDO, Takae)
所属研究機関名：徳島大学
部局名：大学院医歯薬学研究部(医学域)
職名：助教
研究者番号(8桁)：00437633

研究分担者氏名：高橋 亜希
ローマ字氏名：(TAKAHASHI, Aki)
所属研究機関名：徳島大学
部局名：大学院医歯薬学研究部(医学域)
職名：助教
研究者番号(8桁)：70799874

研究分担者氏名：上田 伊佐子
ローマ字氏名：(UEDA, Isako)
所属研究機関名：徳島文理大学
部局名：保健福祉学部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：90735515

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。